

所抄、其意爲備指掌亦用心之勤矣、其偶存者、後世之幸也、といひまた一本に第一帙とある下の書入に、此書稱抄者當矣、今所傳姓氏錄者、廻古之目錄也、可惜全書亡佚、其悉委不可得而考也とも云るは、上件の旨を辨へず、姓氏錄抄と題せる本もあるを見て、抄略本の傳はれると思ひ惑へる言なりかし、全書にも抄字を添て題すること、中世人の常なれば、元無りし抄字を後人の書添たること論なきものをや、凡ての書にも序にも、新撰姓氏錄さのみ有て抄云々は、天曆あたりより後に始れる事にて抄云々すこも有べき書かも、然いふ微き成れりける、此は吾が徒の中にも、然思ひ惑へる人の多かれば、いとも貴き寶典の幸にかく全くて傳はれるを、略本なりと思ひ貶さむことの憤ろしくて、辨へたるになむ。

〔氏族考下〕今世に傳はれる姓氏錄は、抄略本にして、○中其抄略本なる證は、太子傳玉林抄四卷に、新撰姓氏錄第十一卷云、金村連、是大和國城上郡椿市村阿部等祖也、また九卷に、姓氏錄第八卷云、高橋朝臣、本系阿部朝臣同祖、大彥命之後也、孫盤鹿六、猶命、大足彥忍代別天皇謚天武御世、改高橋朝臣姓、三世孫五百足男、從八位上犬養裔孫、從五位上祖麻呂、從七位下石島等也とも、又坂上系圖に、姓氏錄第廿三卷曰、阿智王譽田天皇應御世避本國亂、率母并妻子、母弟廷興德七姓漢人等歸化、七姓者、第一段古行、尖公、字富等、是高向村主、高向史、高向調使、評首、民使主首等祖也、次季姓、是刑部史祖也、次皂郭姓、是坂合部首、佐太首等祖也、次朱姓、是小市佐奈宜等祖也、次多姓、是檜前調使等祖也、次皂姓、是大和國宇太郡佐波多村主、長幡部等祖也、次高姓、是檜前村主祖也、天皇矜其來志、號阿智王爲使主、仍賜大和國檜隈郡鄉居之焉、于時阿智使主奏言、臣入朝之時、本鄉人民往往離散、今聞編在高麗百濟新羅等國、望請遣使喚來、天皇即遣使、大鷦鷯天皇謚仁御世、舉落隨來、今高向村主、西波多村主、平方村主、石村村主、飽波村主、危守村主、長野村主、俾加村主、茅沼村主、高宮村主、大石村主、飛鳥村主、西大友村主、長田村主、錦部村主、田村主、忍海村主、佐味村主、桑原村主、白鳥村主、額田村主、牟佐